南風原平和ガイドちゅ～しん

発行者
第35号

ＮＰＯ法人 南風原平和ガイドの会
沖縄県南風原町字喜屋武２５７番地
南風原町立南風原文化センター内
電話・FAX/　098-889-2533
mail/ haebaru.gaidonokai@beetle.ocn.ne.jp

南部の桜も満開を迎え、私たちを楽しませてくれています。また壕の管理室周辺には、片足のメスのヒヨドリが住み着いていて、私たちを和ませてくれますね。もしかしたら、私たちより、壕について詳しいかもしれません♪

「南風原町平和の礎」の建立

南風原文化センター学芸員　上地克哉

アジア太平洋戦争の終結から65年を迎えた2010年、南風原町は町出身の戦没者名を刻んで慰霊するとともに、負の歴史を正しく後世へと継承していくために「南風原町平和の礎」を建立しました。場所は、旧文化センター隣の慰霊祈和の塔を取り囲むようにして4,481人の名前を字別に刻銘しています。この場所は、戦前に忠魂碑があった場所でもあります。

4,481人とは、1945年3月26日にアメリカを中心とする連合軍が慶良間諸島に上陸した時から、同年9月7日の降伏文書調印の日（沖縄戦の公式終結）までに亡くなった人。また、満州事変にはじまる15年戦争の期間中に、県内外において戦争が原因で死亡した人。さらに、1945年9月7日以降、県内外において戦争が原因でおおむね1年以内に死亡した人の数です。

沖縄戦では、南風原村民（当時）9,600人のうち、約4割にあたる3,800人の尊い命が犠牲になりました。場所でみると、県内で3,500人、南洋で140人、中国・満州で100人が亡くなっています。時期的には、第32軍司令部が南部へと撤退した後の1945年6月1～23日が60%と最も高く、次に5月1～31日の20%と続きます。このことから、司令部が首里から撤退した5月末時点で降伏していれば、これ程までに犠牲は大きくならなかったのです。

Tipsスポット！

赤嶺 勉さん（2期生）

自分のタクシー名からアトムさんと呼ばれている赤嶺勉さんは、いつもニコニコ人懐っこい笑顔と、小柄ながらジャンボなチムグクル（とご本人）で、女性会員からも人気抜群の会のアイドル的存在。そして先月行われた「黄金森周辺ガイド研修」のシナリオづくりも担当しました。「『閃光の中で』『沖縄陸軍病院南風原壕』を何回も読み、和喜前館長、古賀さんのフィールドワークのテープも何度も聞き、2ヶ月以上かけて最初のシナリオを戦跡シンポジウムにあわせてまとめました。その後、何度も手直しして今の形になりました」と言います。ガイドをするときは何度も念入りに下見、そして本番ではほっと和ませる「おやじギャク」連発！がアトム流。

南風原を知りたいと始めた沖縄戦の勉強でしたが、興味は全県に、そして琉球史へと広がり、フィールドワーク参加も熱心です。これからもこの調子で「レッツらゴー！」。（聞き手　本紙編集部　宮川）

陸自駐屯地内の戦争遺跡と広報資料館を見学して

玉城 双善（ガイドの会会員）

南風原平和ガイドの会学習部「ならゆん会」が企画したもので、去った1月19日に行われ、22名の参加がありました。

初めに基地内の広報資料館を係員の案内で見学しました。まず県内における不発弾の処理や急患の輸送の実績等の説明があり、その成果を強調していました。隊員の方々が、日夜命がけで作業していることには敬意を表します。県内の不発弾の処理は、戦争を起こした国の責任者として当然そのノウハウを持っている自衛隊が当たるべきであると考えます。また国民である以上、どのような地においても命の格差が生じてはなりません。そのような意味から人口の少ない離島僻地においても、国民が安心して暮らせるような医療設備を整えることは、国の責務です。それができていない今、その能力のある自衛隊が急患輸送をするのもまた当然であります。自衛隊は、むしろそのことに徹するべきではないでしょうか。

次に管理課の係員の案内で基地内にある壕を見ました。高射砲部隊の壕は縦1m位、横80cm位の狭い入口を入ると中はかなり広く縦1.9m、横1.8mで全長が300mもある壕です。石灰石が白っぽいせいか壕の中が明るく感じられました。壕の中ほどには幅90×奥行220cmの貯水槽があり、湧水が今でもかなりの量湧き出ていました。ところが、この壕は生活感が無く、あまり使われていなかったのではと感じました。

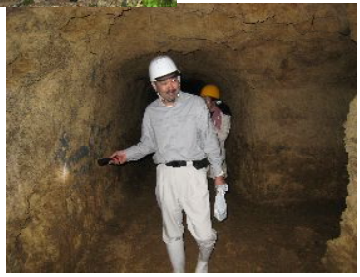
次に通称「らくだ山」と呼ばれている丘にある壕に入りました。この壕は、ニービ（砂岩）の岩盤をくりぬいて造られた壕です。基地内の壕は総じて、生活道具等が当時のまんま散乱し人の手が入っていない状況で残っていました。

この地は、戦後すぐ米軍が基地を築いたので住民が入れなくて当時のまま残っていると思われます。

南風原の20号壕は連日多くの見学者が訪れていますが、その管理方法が今後の大きな課題となるのではないでしょうか。

↑広報資料館で説明を受ける

↑高射砲部隊の壕
←らくだ山に残るトーチカ跡
↓らくだ山の壕



1月定例理事会

2011年1月13日（木）　18:00
・マップ作りの進捗状況報告
・平成22年度の予算の用途変更について　　他

アンケート・お手紙のご紹介

毎回、多くの皆様からご意見を頂き、ありがとうございます。多くの人々で共有し、壕運営の一助 にさせて頂きます。

宮城喜久子さん著書の”ひめゆりの少女”を読み、南風原壕群20号のことを知りました。1年かけて沖縄戦について書かれた本を読み、今年の11月に沖縄へ行き、荒崎海岸やひめゆり平和祈念資料館、平和祈念資料館を見て歩き最後に壕を見学しました。想像していたより狭くて奥に長く驚きました。ガイドの琉球大学の福さんのていねいな説明もわかりやすくてよかったです。

11月21日　北海道　40代　女性

見た目はすっきりしていてシンプルできれいなので中もすごしやすいかと思っていたら、入ったとたんメガネはくもるし、ヘルメットかぶらないとキケンそうだし、せまいし、よくぞここを病院とよべたものだと驚嘆した。交差点を手術室といっていたけど衛生面であんなにひどいところで治療なんてしてはいけない、ということを平和だから感じられるんだろうなと考えたりした。やっぱり壕は壕であって病院ではない。そこまで戦争が全てをくるわせるんだなあ

12月25日　大阪市　30代　女性

忌わしい戦争の歴史を風化させることなく、沖縄だけでなく、全国の人達に伝えていくこと は非常に意味があると思います。

12月28日　佐倉市　40代　男性

壕内をマンツーマンで案内していただき有難うございました。損傷部分をみて、「保存」と「見学」を両立させることの大変さを痛感いたしました。また再訪したいとおもいます。

1月4日　伊勢原市　40代　男性

沖縄に赴任して約1年半。せっかく沖縄に来たのだからという思いもあり、戦史に関連した場所にいろいろと案内をしていただきました。今回初めてこの壕と文化センターを見学させていただきました。わかりやすいガイドさんの話のおかげで、いい体験ができました。今回は時間があまりなく、文化センターのDVDが観れなかったので、また行きたいと思います。ありがとうございました。

1月7日　那覇市　40代　男性

大変、貴重な物を見学しました。時代が違いますがもしかしたら、自分がいたかもしれないとおもいました。平和な時代に生まれてよかった。あした、遺骨収集があります。生きている者のつとめとして、皆を国に帰してあげたいと思います。

1月14日　千葉県　50代　男性

ガイドからの

しつも～ん！

Q黄金森の戦争遺跡の発掘調査は今後も続けられるのですか。(M)

触るのが危険なほどに埋没してしまった壕が多く、残念ながらこれ以上の発掘調査は難しいのが現状です。遺骨・遺品は当然、今なお数多く残っています。(学芸員上地)

Q津嘉山経理部壕見取り図(「南風原が語る沖縄戦」P41)に「漁労隊」とありますが、何をした部隊ですか。(A)

Wikipediaの「焼津港の徴用船」の表から「戦争で徴用された焼津の船と船乗りたちが陸軍の漁労隊として沖縄戦で15名が戦死した」ことがわかります。また津嘉山地区D壕から直径25㎝程度のガラス製の浮き玉が11個、鉛製の錘などの漁具が発掘により出土しています。それらと高津嘉山の漁労隊との関連があるかもしれないと発掘調査報告書に書いたのですが・・・、それ以上の詳細は私もまだわかりません。
(学芸員上地)

みんな、風邪には気を付けてね！

連載「閃光の中で」
沖縄陸軍病院の証言

沖縄戦前夜の予備軍医達
(1)
軍医見習士官　長田紀春

大城森

薄い乳色の霞が穏やかにながれている朝だった。見え隠れに先へ先へと続いている軽便鉄道のレールに沿いながら、私たちは脚を速めていた。南の島沖縄に遅れてやってきた秋らしい爽やかさが、低い山々や色付いた甘庶畑に漂っているのだが、私達の胸は今人生の一つの岐路に近づいていくような緊張感と微かな重苦しさで一杯だった。

戦争は5ヶ月前に既にサイパン島の守備軍が玉砕し、勢いに乗った米軍は怒濤の如くフィリピンに迫ってルソン島への上陸も旬日中との予想であり、日本軍の配色は漸く落ちていく西日のように次第に誰の目にもはっきりと写しだされてきていた。そして、昭和19年10月10日、米空軍による大空襲で那覇の街並は文字通り灰燼に帰し、中心部は全て瓦礫の山と化していた。

那覇にいた被災者の医師たちは焼け落ちた病院を後にして身寄りや縁故を頼り国頭や本土に疎開していたが、体力的に準戦力ありと見なされていた比較的若い医師は軍医としての召集を上告されて、県外に脱出するのを固く禁じられて足止めをされていた。

そして、この朝、沖縄で初めての予備軍医の教育召集令状を受けて私達は集合場所の高嶺製糖工場前広場を目指して歩いていたのである。11月に入ると夜の明けるのが遅くなってきて、午前7時の集合時間には間に合わない恐れがあり、私は糸満で産婦人科病院を開業しておられ、共に召集を受けた古謝将厚先生の御宅に一晩泊まり、早朝一緒に高嶺に向かったのだった。

集合場所の製糖工場は朝の冷たい空気を湛えながら広々と静まり返っていた。その入口では既に5、6名の医師が低い声で話しながら立っている。すると霞の中から威風堂々と馬上に跨った乗馬姿の人影が従卒を引き連れて悠然とやってくる。やおら馬から下りたその巨漢は我々に向かって手を挙げ、やがてにっこりと笑った。

玉城村に開業している大城幸雄先生が往診用の馬に乗り、助手を従えての入隊なのだ。

「なんだ君か、どこかの部隊長かと思ったよ。驚かすなよ」

いつの間に来られたか大宜見朝計先生の持ち前の闊達な大声がして淀んでいた辺りの緊張が破れ一同が笑い出す。

定刻ちょうど、山部隊将校保田井少尉が教官として我々の前に姿を現し、点呼を終わった18名の医師を引率して宿営地に向けて出発したのである。南山城址南方の原野の中に高さ30メートルの小高い城跡があり、土地の人はこの森を大城森と呼んでいる。その山肌は松や雑木の緑で覆われていたが、その中腹を切り開いて野戦用のテントを張った場所が我々の野営訓練場であった。

その日から2週間の激しい軍事訓練が始まった。病人の柔肌や医療器具しか手に触れる事のない医者連中が、起床ラッパに起こされて大慌てで中古の軍服を身にまとって大きな軍靴を引きずりながら整列する姿は全くサマになっていなかったが、本人は皆懸命であった。帽子をアミダに被ったり、ボタンを掛け忘れたり、不慣れな手つきで銃を担いで行進すれば、たちまち銃を音高く地べたに落とし、その度に教官からしごたま気合を入れられる風景が毎日みられる日が続いていった。

やがて昼間の疲れでくたくたになり、ゴツゴツした土床で薄い毛布も気にせず死んだように眠りこんで、不寝番に当たって起こされるのが何よりも辛いと思うようになった頃、皆の人相が少しずつ軍人らしい容貌に変わっていった。そしていつの間にか色の黒さと無精髭がよく似合う本物の兵隊のような顔つきで山盛りの飯盒めしに食らいつく姿の18人になっていたのである。

大城森のテント生活の上に晴れた日が続き、雨が降り、やがて2週間が経っていった。いよいよ最後の南風原までの行軍演習を以て我々の身柄は陸軍病院に移され、教官保田井少尉に別れを告げることになった。

「閃光の中で－沖縄陸軍病院の証言－」より転載